



SDGs
report

サステナビリティ海外事例 VOL.10

女性視点にはサステナビリティはこれから外せないテーマ。暮らしを通じて地球環境や社会に役立つ自分でありたいと思う女性たちの意識は年々上昇している。そうした視点をビジネスの現場に先行して取り入れている海外事例をよく知る安並氏に、現地レポートからヒントをいただきます。

サステナブル社会では「消費後」も重要な鍵 循環型社会の実現をめざして

99%リサイクル。人々に根付く 「ゴミの全てが資源」という考え方

今回は、「ゴミ」のお話。これまで「消費」に関するレポートをお伝えしてきましたが、SDGsについて考えるとき、「消費後」こそSDGsの重要なポイントがあります。皆さんの地域では、週に何回か、ゴミ収集車が集積所にやってきて、家庭ゴミを収集していますね。地域差はありますが、可燃、不燃、有価物など、いくつかに分別され、現在は多くがリサイクルされるようになりました。可燃ごみには、生ごみ、紙やプラスチックなどのパッケージが混在し、多額の税金を使って焼却処分され、焼却灰は埋め立てられます。缶や瓶などはかなりの割合でリサイクルされますが、リサイクルの優等生に見える「ペットボトル」は回収されても約7割が焼却されています。そもそも日本は、効率よく集めて燃やすという手取り早いインフラ整備が中心でした。



かっこいいゴミ回収車。女性も働いている

スウェーデンでは、さらに細かく分別されていて、地域差はあるものの、15種類ほどに分別され、ほとんどのものがリサイクルされます。「ゴミ」という概念がなく、すべてが「資源」なのです。スウェーデンでは99%がリサイクルされます。まず家庭内でかなり細かく分別されます。とてもきれいな国民性なので、外から見えないよう

シンク下などに回収ケースがあって細かく分別しています。戸建ての場合、街のリサイクルステーションに捨てるか、回収業者と個別契約をします。屋外に置かれた専用ボックスにいつでも収められ、週に1回程度、あるいはセンサーのついたボックスは、一杯になったら回収されます。家庭訪問したときに感じたことですが、スウェーデンの家庭ではいわゆる「ゴミ」というものが極端に少ない。レジ袋を使わず、過剰包装をしない国柄だからでしょうか。家電や家具、分別が難しいものは、自らリサイクルセンターに持ち込み、指導員の指示に従って分別を行います。



家庭内でも細かく分別 ソーラー発電センサー付きゴミ箱 街の中には沢山のリサイクルステーション
満杯になると回収車がくる

サステナブル社会は、 極めて合理的で効率的な社会

私たちにとって厄介な生ごみについて。日本では回収曜日が決まっています、それまでは家庭内に保管しなければなりません。スウェーデンでは、「生ごみ」はエネルギー原料という考え方です。全ての生ごみは、バイオガスの原料となります。新しくできた街やアパート・マンションなどでは、一定の戸数ごとに自動収集システムが置かれ、いつでも捨てられ、バキュームシューターで一か所に集め



井関産業株式会社
代表取締役社長
安並 潤

容器包装資材の販売、セールスプロモーション事業などの展開を行う中で、サステナビリティを経営のベースとし、経営革新とイノベーションに取り組む。北欧スウェーデンを中心に、サステナブルな仕組み、モデル、商品開発、行政、教育機関、都市計画をベンチマークし、自社の経営に取り入れる。

られます。けたたましくゴミ収集車が街を走ることはありません。集められた生ごみは、バイオガス工場に送られガスを製造、各家庭に送られたり、公共交通、自家用車の燃料として活用されます。もちろん、戸建てから集められた生ごみもバイオガスの原料となり、化石燃料に依存しないクリーンでグリーンな社会です。



生ごみ回収システム



回収システムで集められた生ごみは
バイオガス工場へ

サステナビリティを考え実践するという事は、モノの生産と消費だけでなく、消費後どうなるのか、ということまで考えなければなりませんね。皆さんが今消費したものは、その後どうなるのか。焼却されて温暖化ガスになるのか、あるいは環境に負荷をかけることなく形を変えながら循環させるのか。私たちは本物のリサイクル社会を創らなければなりませんね。それが最も合理的で効率的な社会なのです。



バイオガスで走るバス

